

美味しい料理と美味しいお酒を気軽に・・・

こんにちは！サーマルタンクの新洋技研です！まだまだ暑い日が続きますが、お元気で過ごすごですか？今年ほどに災害が多く、各地で大きな被害が出ています。罹災された皆様の心痛はいかばかりかと・・・。一日も早い復旧を願うばかりのこの頃です。

さて話は変わりますが、。以前当社に大学を出たばかりのコンサルタント会社の若手営業マン「K君」がよく顔を出しておりました。彼は大阪出身で、約3年新潟勤務の後転勤で東京へ行き、現在はその会社を辞めて大阪に戻り神戸のある会社に勤務しています。普通なら当社の担当では無くなった時点で交流を持つことはまずないのですが、どういわけかその後もたまにメールのやりとりをしたり、出張した折に都合が合えば飲みに行ったりしています。K君は当社に通って日本酒のことを聞くうちに興味を持ち、あれこれ飲むようになり、今やなかなかの通になっていくようです。そのK君と先般関西出張の折、久々に会って当社営業所の寄駅からひと駅、御堂筋線「西中島南方」駅そばの「遊食屋 創彩」というお店に入りました。このお店はホットペッパーでたまたま見つけたのですが、野菜料理に大変力を入れていて、バリエーションが豊富でとても美味しいのです。もちろん野菜以外のメニューもあります、それなくしても満足してしまうくらいです。そしてお酒もそれなりに選ばれたものを置いています。日本酒も銘柄こそ少ないものの、きちんと管理がされていました。その店のオーナーは北畑さんという方ですが、お酒を頼む時にK君が、私が日本酒関連の会社だと言ったことがきっかけとなり、お酒と料理についての話で盛り上がりました。その中で僭越ながら、お酒の店出し価格をもっと下げ、量もちよつと少なめにして気が付いたら結構沢山飲んでいたという仕掛けをしたほうが量も出て売上も上がるのでは？そして、取り扱っているお酒と相性の良い料理を考えてお客さんに勧めてもらったり、お酒の選定がわからない人にはこの料理にはこのお酒をどんなふうにして飲んだら美味しいと思うというアドバイスをしてあげて欲しいと話しました。北畑さんは是非もつとお酒について勉強したいと言われていました。美味しい料理にはやっぱり美味しいお酒が側にいて、気軽に楽しめるお店がもつともつと増えて欲しいと願っています。マイ「お気に入りのお店」リスト入り！です(笑)

日本の野鳥シリーズ

長元坊の子育てはおおらか

技術営業部 佐藤 弘

やたらな所に車を停めて双眼鏡を取り出したりすると、不審者と見なされ警察に通報される事を承知の上でこの春チョウゲンボウの観察を始めた。私が所属する新潟県野鳥愛護会が、県内における本種の棲息実態調査を会員に呼びかけたことに応じたものだ。厄介な事に、本種は最近ではそんな町なかでも営巣する小形のタカだ。

ハヤブサの仲間だが、兄貴分のように急降下の猛スピードでカモを蹴落したり、自身がブーメランとなって小鳥の群に突っ込み、その翼をへし折ったりするようなド派手な狩りはやらない。ひたすら小鳥を追跡して相手のスタミナ切れを待つか、畑や草地などでは停空飛翔で狙いを定め、急降下してハタネズミやカナヘビを捕らえる。

ところで、小鳥類の親はヒナがロクに飛べない時期に巣立たせるのは、外敵に全く無力なヒナを一ヶ所にかためておいたら全滅させかねないので、バラケさせて茂みに隠し危険分散を図るためという。その点本種は「気力体力充実した子は勝手に巣立ちなさい」方式だ。

調査初日は私を警戒して、オスから受け取った獲物をメスが一向に巣に運ばない。ヒナの居場所を知られたくないと読めたので、すぐにその場を離れた。翌日からメスは私を無害と認識したらしく、ヒナに餌をちぎって与える動きを見せた。数日後には、意外にもメスは巣に獲物を「丸投げ」して常時巣を見守るTVアンテナに戻った。

それでは公平に餌が行きわたらないのでは、という心配は無用だった。ヒナの発育程度にかなりの差は見られるものの、小鳥類の巣立ちに繁殖期を合せているから餌が不足することはない。それより、各種獲物を丸ごと貰ったヒナが、巣立ち前からそのさばき方を充分に習得できるメリットのほうが大きいようだ。観察した二ヶ所の巣の内、東の巣からは9日間に6羽が、西の巣からは4日の間に5羽が巣立った。あとは親を手本に狩りを学べば完全に自立できる。相手はロクに飛べない小鳥だから、ハンター・デビューは訳もない事だ。

さて、かつて「私はタカ派」を宣言した。即ち、追い追われるタカと小鳥のどちらを応援するかと訊かれれば、これ以上数を減らしてほしくないからタカだと述べた。それなら私がワシタカ・ファンの猛禽オタクかといえ、とんでもない。鳥が鳥を襲って食うことを悪ガキの頃からまだ容認できていない。

それでなくても悪党ヅラのお前のことだから、もちろん通報されたらどうですか。いえ、セーフでした今年は。

弊社は今が忙しい時です。お客様が閑散期（6月～10月頃）になるので、この時に忙しくないはずなのですが、家に帰って夕飯を食べるのは8～9時頃になります。（世間ではもっと遅い人もいます）そこで一杯飲みながら夕飯を頂くのが日課なんです。TVを付けると、newsか歌番組なんか良く見えます。最近の歌番組を見てると、AKBとか少女時代、Kepop、ジャニーズ系etc・・・、何か乗りは非常に良いんだけど、全然日本酒に合わない気がします。

やっぱり今の若い人たちはこういう軽くてテンポの良い曲を聴いているからか、カクテルとかアルコールの低い発泡系の飲み物なんかを好むのでしょうかね。

私は夏はビールから始めますが、やはり日本酒を呑みます。その時はポップス系より演歌だなあ～って思います。

「♪あなた変わりは無いですか～」 「♪愛しても愛しても、あ～人の妻」 「♪無理して～呑んじゃ、いけ～ないと」 「♪私バカよね～おバカさんよね～」 バカなんだ、ホント男ってバカなんだ（涙）。

やっぱり曲のテンポがゆっくりで悲しい曲だから落ち着いて呑んじゃうのかなとも思うのですが、どうしてどうして、結構明るく楽しいアップテンポの曲も合うんですね。

「♪瀬戸はしぐれて夕波～小波～」

「♪ワッショイ、ワッショイ・・・、そ～れそれそれ、お祭りだあ～」 めでたい時もやっぱり日本酒ですよ。

昔は冠婚葬祭どんな時も日本酒が付き物のだったような気がします。それに引き換え今はインターネットで行った事のない海外の情報まで手に取るように得る事が出来ます。だから呑んだ事のない物や食べた事のない物、聞いた事のない物まで若い人の方が良く知っているのが現状です。

価値観の多様性と言うのは良い事だと思いますが、反面昔からの伝統やらが衰退して行く気がして残念に思います。

この際酒の好きな年代が、もっともっと若い人と呑んで昔からの良い物や経験なんかを伝承して行かなければならないのではないかと思います。

さてそう言い事で我が家も日本酒の発展のために「♪酒だ、酒だ～、酒持って来い！」 「あなた！呑み過ぎ！もうダメ！」

「え～・・・、♪呑ませて～下さい。もう少し～」

「ダメ！！」・・・（泣） と言う事で、今回はお開きです。

ホントにもう一杯ダメ？・・・「ダメ！！（怒）」・・・トホホ。



この春、簡易型火入れ酒急冷装置（以下『急冷装置』）のデモ運転でお客様のところにお邪魔した際、興味深い体験をしました。

その日、3kLのタンクに純米大吟醸を二本火入れし、一方を急冷装置で、一方をお客様が通常されているタンク上部からのシャワーで冷却しました。

急冷装置を運転する際は冷却水の流量を必ず把握するようにしています。参考にといい、お客様に「シャワーで冷却する場合の冷却水の流量はどれくらいですか？」と聞くと「計測したことがない」と言います。折角だからということで流量を調べ、タンクに水を掛けているおおよその時間から、火入れ酒を冷却するのに要する水量を計算し、急冷装置のそれと比較しました。

結果は、シャワーが21.1L/minで21h使用し26.5t、急冷装置が105L/minで115min使用し12.1tの冷却水を使用していました。これまでの冷却法が、思いの外水を沢山使っているという結果に、訪問先のお客様は大変驚かされていました。

話は変わりますが、私が以前お世話になっていた酒蔵では、仕上げのろ過に要する時間等のデータを新たに記録することにして、同じ液種、同じ数量の酒でも、夏と冬でろ過に要する時間に大きな差異のあることに気がきました。恐らく、酒の温度に起因する粘度の違いによるものと思いますが、一年を通じて測定し、記録を取ったからこそ把握できたことです。

品質・工程の改善は現状の正しい把握が第一歩。どうにかしたいとお考えの方は、「測ること」「記録すること」からまずは始めてみませんか。

南極クルーズで探検家気分してみたい モツセイ 生産部主任 島貴 修一

テレビを地デジに換えてからBSを見られるようになったので、海外を紹介する番組を好んで見ている。その中でもクルーズには興味を引かれるが、多くのクルーズは豪華ホテルとテーマパークをいっしょにしたような超大型客船で、食事とショーを楽しみながら寄港先で観光をするもので正直言って好みではない。船に乗ってまでショーを見たいと思わないし、アスレチックも食べきれないほどの料理もいらぬ。ましてドレスコードのあるディナーは想像するだけでぞっとする。正装して気の利いたジョークで会話を盛り上げながら食事をするなんて、緊張で味が分からなくなりそう。ところがそんな変人にも乗りたいと思う船があった。プロフェッサー・マルタノブスキーでの南極クルーズだ。

ロシア船が南極まで出稼ぎに来ているのも驚きだが、もっと驚くのは船の大きさに1753t全長65mに過ぎない。10万t全長300mの超大型客船と比べればちっぽけな小舟だ。当然ながら船客数は48名で乗員も30名とこじんまりしているから、船内にあるのは船室と食堂とラウンジだけだがこれで十分だ。自分なりに航海を楽しみたいから双眼鏡と六分儀を持ち込めば（船酔い止めの薬も）、気分はキャプテン・クック。探検と思えば魔のドレーク海峡の荒海も乗り越えられるし、その先に南極の氷山が待っている。世界中からやってきた他の客達とは、同じ目的を持った探検仲間としての会話と交流を楽しみたい。

問題はこの船に乗るためには、地球の反対側の南米のそのまた南の先っちょまで行かねばならないことだ。港にたどり着くだけで疲れ果てそう。